

# 創造都市を創る目

大阪ガス エネルギー・文化研究所 所長 安達 純

Written by Jun Adachi

## 横浜を歩く

『CELからのメッセージ』がだんだん理屈っぽくなっているみたい」と読者の方からご指摘を受けた。それで少し反省して、今回は肩の力を抜いてみたい。私の経験では肩の力を抜くには、ぶらりと歩くのが一番だ。そこで二月の中旬、地図を片手に、魅力あるまちとして評判の横浜を一日かけて歩いてみることにした。

さてどこからスタートするか。やはり、横浜の歴史がそこから始まったという関内(かんない)を起点とするのが最もオーソドックスな歩き方だろう。

新横浜からJR在来線に乗り換えて関内駅を降りると、すぐ目の前が市庁舎である。その一階には郵便局や銀行が入居しており、市民が気軽に市庁舎の中に入っていく。やや年配の女性が一人案内所において、どんな相談にも、まずは笑顔で応えてくれる。横浜の昔からの玄関口である関内の、そのまた玄関口に市庁舎があって、しかもそれが市民の日常生活に溶け込んでいく、というのが横浜の第一印象であった。

その市庁舎から東に向かう。横浜港へと通じる「みなと大通

り」をひとつ隔てると横浜スタジアムである。ナイターの季節ともなれば、野球ファンの熱狂的などよめきが付近一帯にこだますのだろう。そして、

スタジアムのすぐ隣が中華街になる。ここは平日でもたくさん観光客や修学旅行の生徒たちで活気に溢れている。中華街まで、関内駅から歩いて一五分とかからない。

もう少し足を延ばすと元町商店街に入る。ここは、ショウウインドウを覗きながら、ぶらぶら歩くにはもってこいの場所だ。くねくねとカーブする一方通行の車道は、車を完全には排除してはいないが、遠慮しながら通行してほしいといったげである。それにレンガ敷きの歩道がいやに広い。よく見ると、商店の一階部分がセットバックしているのだ。二階部分はそのままなので、空に向かってせり出した半アーケードのように私たちが柔らかく包み込む。そして、カーブする歩道に沿って私たちが歩を進めることに、まちは違った表情を見せることになる。端から端まで七〇〇〜八〇〇メートルある商店街の一階部分の全部がこのようにセットバックされているが、この町並みができあ



元町商店街

がるまでにどれだけの時間がかかったことだろう。そしてここは、シーンズ姿の若者が一人歩きしても、少しめかした熟年カップルが手を組んで歩いても様になってしまふ、不思議な雰囲気を持った空間でもある。

元町商店街の背後はなだらかな丘になる。かつて居留地

として多くの外国人が住んでいた山手町である。現在は、学校教会や博物館などが集積する文教地区と閑静な住宅地になっている。今でも残っている西洋館のいくつかは、横浜市に買い取られ無料で見学することができる。ボランティアが、建物の由来や横浜の歴史などを教えてくれる。館によっては中の部屋を、例えば絵画の趣味の会などで使わせてもらうこともできるそうだ。二階の窓からは遠く海が望める。前庭に設けられたオープン・カフェでは、お年寄りが新聞を広げてコーヒーを飲み、街角の小さな公園では、金髪の婦人が子供を遊ばせている。ここでは時間が、たゆたいながらゆつくりと流れている。

有名な外人墓地と港の見える丘公園は、この丘の一番北側にある。そこを下ると山下公園だ。すぐ目の前には横浜港が広がり、無数のカモメが飛ぶ。平日の午後でも思いのほか多くの市民がベンチに座り、晩冬の柔らかな日差しを浴びながらおしゃべりに余念がない。

山下公園の南側一帯が官庁・ビジネス街である。ここには開港資料館や開港記念会館、県立歴史博物館をはじめとする古い建物や、馬車道など横浜開港の歴史を思い起こさせる町並みが数多く残っている。しかもそれらは単に保存されているのではなく、その建物にふさわしい用途で今もなお現役として立派に活躍しているのだ。私が訪れたこの日、開港記念会館では経済



県立歴史博物館(手前)と日本火災横浜ビル(奥)

してより大きな相乗効果を発揮しているように感じられる。そのビルの玄関のところに、次のようなプレートを見つけた。

横浜市認定歴史的建造物  
日本火災横浜ビル  
復元一九八九(平成元年)年  
旧建物築年一九二二(大正一一)年  
旧建築設計者 矢部 又吉  
一九八九年  
横浜市

こうして官庁・ビジネス街をひとわり歩いてJR関内駅に戻る。関内駅の反対側には、伊勢佐木モールが延びている。ここは、古くから歩行者天国と電柱の地中化が進められたそうであるが、雰囲気としては地元の人たちのショッピングセンターという感じが強い。

これで横浜の旧市街ともいえるべき関内とその周辺をおおよそ一巡した。三三〇万の人口を擁する大横浜には、このほかにも国際文化都市・横浜を象徴する「みなとみらい21」や、大ベックドタウンである港ニュータウンなど、見たいところはたくさんある。けれども、そこまで足を運ぶのは一日ではとても無理だ。

団体主催の環境講演会が開かれていた。  
県立歴史博物館の隣は、一〇年ばかり前に建て替えられた民間のビルであるが、古い外観と内部の新しいセンスが見事に融合して、一〇〇年の歴史を誇る県立歴史博物館に拮抗している。さらに、二つの建物が調和

そこへの訪問は他日を期することにして、とりあえず区内に別れを告げることにした。もう一箇所寄れるとしたら、JR横浜駅周辺ぐらいだろう。蛇足だが、このときJR関内駅に向かう途上で、近道として市庁舎の一階廊下を通り抜けさせてもらった。そんなことをしても叱られないような雰囲気がこの市庁舎にはある。

現在、大横浜の中で最も賑やかなのが、横浜駅東口のそこらや地下街「ポルタ」、そして西口の高島屋、相鉄ジョイナス、ダイヤモンド地下街一帯なのだそう。一日の仕事を終えてほっと一息ついたり、ショッピングしたりする若い女性の姿が目立つ。ここから東京の渋谷まで私鉄の特急で三〇分ほどだが、ショッピングのためだけなら、わざわざ東京まで出かける必要はないだろう。横浜駅近辺で十分用が足りる。むしろ東京から買い物を引き寄せているかもしれない。それほど多種多様な魅力的な店が集積している。そこら地下の時計台の前では、待ち合わせの人々でごったがえしている。

## 創造都市を創る目

以上は、午前七時新大阪発の新幹線に飛び乗って一〇時に足を踏み入れ、そして晩の七時に別れを告げるまでの、わずかに一日における横浜の印象記である。それから何が言えるかということあまり自信はないが、今回は直感勝負で一点だけ指摘してみたい。

今回歩いた横浜は、地域ごとに魅力的な個性が感じられた。市民に開かれた市庁舎に始まり、中華街、元町商店街、山手、山下公園、官庁・ビジネス街、伊勢佐木モールなどそれぞれの場所が、訪れる者の目と心に強く訴えかけるものを持っていた。

そして、私が特に強調したいのは、それらの印象が決してバラ

バラではなく、有機的につながり、調和がとれ、ワンセットになっている『横浜』という都市を構成していると感じられたことである。それぞれのパーツに、大きな障害もなく歩いていけるという地勢的な条件も有利に働いているであろう。しかし、少し比喩的な言い方になるが、どこか高いところにある共通の視点が、横浜のまちづくりには働いているように思えてならない。横浜の各地域は、横浜全体を意識しながら、それぞれの地域づくりに取り組んでいるのではないだろうか。そのために、各パーツの個性の発揮と、全体としての調和が同時に実現されているのではないか。

それぞれの地域内のまちづくりについても同様なことが言えると思う。元町商店街での一階部分のセットバックは、商店街全体の活性化のためという一段高いところからの視点が働かなければ、とうてい実現は不可能である。

『創造都市』とは、本号に寄せられた論考の中でも指摘されているように、その土地に固有な財産をそこに住む市民自身が再発見し、新たな魅力として再構築する営みがあつてはじめて可能になるものがある。その際、市民自身が、一段高いところから見る目を自らの中に創り出すことができるかが重要な鍵を握っているように思われる。

CEL



山手の西洋館